

貨幣資本の造出とその限界

小 牧 聖 徳

- 一、貨幣資本造出機能
- 二、銀行貸出の経済的性格
- 三、貨幣資本造出の限界
- 四、むすび

一

レーニンは帝國主義論第二章の冒頭において「銀行の基本的なまた本来の業務は、支払いの仲介である。

このことと関連して銀行は遊休貨幣資本を機能資本に、すなわち利潤をもたらず資本に転化し、ありとあらゆる貨幣収入をかきあつめて、それを資本家階級の管理にゆだねる。銀行業務の発展と少数の銀行への銀行業務の集積とに応じて、銀行は仲介者というひかえめの役割から生成転化して資本家と小経営者との総体の貨幣資本のほとんどすべてと、またその国やいくたの国

々の生産手段および原料資源の大部分とを自由にする全能の独占者となる。多数のひかえめの仲介者からひとにぎりの独占者へのこの転化は資本主義的帝國主義への資本主義の成長転化の基本的過程の一つをなすものである」とのべ銀行の機能並びに銀行の発展について論じている。ここで銀行の機能についていえることは、先づ銀行が支払いの仲介をなすとともに休息態の貨幣資本やあらゆる貨幣収入をかきあつめ、それらを機能資本に転化して資本家階級の管理にゆだねるといふことである。

さらにヒルファードディングにおいては銀行の機能としてつぎの三者をあげている。「一、支払取引の媒介者として作用すること——そして銀行は地域的に異なる支払や相殺の集中によってこの作用を拡大して行く。

二、休息状態にある貨幣資本を機能的な貨幣資本に転化すること——銀行がこれを集積し、集中し、配分することによって休息貨幣資本は社会の資本循環に必要なその時々^々の最低限に縮小される。三、他のあらゆる階級の貨幣形態における所得を集合し、これを貨幣資本として資本家階級に融通すること——かくして銀行が管理する彼等自身の貨幣資本以外に、他のあらゆる階級の休息貨幣が生産的充用のために資本家の手に流れ込む。」ヒルファードディングにおける銀行の機能はレーニンの場合とほとんどかわるところがない。ただ幾分具体的に説明が附加えられたにとどまる。

さらに新庄博士は「銀行は国民所得の貯蓄分を蒐集し、さらに資本的流通過程において創出される資金をこれに加えて投資および、再投資を行う企業者に配分

する」という社会的機能を営む³⁾とのべていられる。

以上すべてについてみられることは銀行の媒介的機能のべられているのに対し、その創造的活動についてはふれられていないことである。休息貨幣や休息貨幣資本は、もし銀行なかりせばそのままで休息状態におかれるかも知れない。だからそれらを銀行がかきあつめて作用資本に転化することは、ある意味では貨幣資本の造出、したがって創造的活動といはれ得るかのようである。しかしこの場合における創造は既に存在しているものを活動させるまでであつて、銀行みづからがあたりしくつくり出したものとはいえない。これは積極的な創造に対し、言うなれば消極的な創造である。われわれは積極的にあたらしくつくり出されるものを問題にするのである。

すでにのべたように、銀行の機能において問題のあるのは銀行が支払取引の媒介者として、あるいは休息状態にある貨幣や、休息状態にある貨幣資本を蒐集してこれをば貨幣資本として社会に提供する——機能資

本に転化する——という媒介的機能におけるよりも、むしろその創造的機能においてである。

ところで個別的經營的立場において創造的機能——貸出にもとづいて貨幣資本が供給される——であったとしても、社会的全体の観点からは貨幣が流通界から引き上げられることによって相殺され、預金通貨をもふくめて既存通貨の銀行による媒介にすぎない場合もある。このようなときには銀行があたらしく貨幣資本を社会に送り込んだわけではなく、全体としては創造ということにはならない。ただその方向がかわつただけである。社会的観点からする貨幣資本の貸出方向の転換は媒介的機能に属し「資金の質的統制」につらなる問題を提起することにはなるけれども、常に資金の量的増大を惹起するわけではない。われわれの問題はむしろ既存通貨量をさらに超えて、それ以上に銀行みづからがあらたに貨幣資本を造出するという点である。

ヒルファードイニングは休息貨幣、休息貨幣資本を機能資本へ転化する機能をなす信用を資本信用となづけ

ているが、この休息貨幣や休息貨幣資本は銀行の預金となり「経験は銀行にたいし、正常時にはそれより減ずることのない預金の最低限を示し、そしてこの類だけは何時でも銀行をして生産資本家に融通することを得しめる」のである。いわば経験的に知られる銀行預金の滞留分を銀行は貸出することが出来るわけである。しかしわれわれはその上にさらに、それらを基にして銀行みづからが貸方記入によって創出する預金通貨の形態での貨幣資本を附加えなければならない。

この貨幣資本の造出は技術的には銀行が先づ貸出をおこなうことによつて、その貸出分を預金に振替えることによつてなされるのが通常である。この場合、現金を借手に渡すかわりに、その分だけ帳簿上における銀行の債務となつてあらわれることになる。造出された預金は小切手で流通するのが本来であるが、時には現金で支払を要求される部分も存在することは否定出来ない。この部分に対する準備は、銀行の蒐集したあらゆる階級の所得や資本循環過程においておのづから発生

する休息貨幣資本によって、引当てられ調達されなければならぬ。もしそれを超えて現金を必要とするときには、ついには中央銀行に依存せざるを得なくなる。ここにおいて銀行は中央銀行をも含めて全体として、貨幣資本をあらたに社会に供給するということになる。

貨幣資本の供給は預金の形態でか、あるいは現金の形態でか、そのいずれかの形態であられるが、それが現金の形態であろうと、預金通貨の形態であろうと共に銀行による貨幣資本の供給たる点においてはかわりはない。

銀行による貨幣資本の供給が如何なる程度まで可能であるかは、銀行の信用創造の限界につらなる問題を提起する。

註1 銀行の活動はこれを銀行経営そのものの立場から具體的にどんな仕事を行つているかを見るときには、銀行の業務 Business として把握することが出来るけれども、それを更に広く社会的地盤に立つて見るときには、銀行の機能 Function として区別することが出来る。勿論、両者は銀行活動のうちに包含されるけれども、一方は個別的具体的であり他方はより広く社会的全体的であるとい

貨幣資本の造出とその限界(小牧)

える。

2 ヒルファードイニング「金融資本論」林訳一四一頁
3 新庄博「金融論」二四九頁

4 本稿では貨幣という語を言葉の最も広い意味において使用するのであるが、貨幣の持つ狭義広義のそれぞれについて明かにしておかなければならない。われわれは貨幣とは商品交換の発展のうちにおのずから発生する一般的等価物たる特殊な商品であると解する。この一般的等価物としては家畜其の他が歴史上にあらわれたが、遂には金に固有の物理的性質によつてこの一般的等価物の役割をば金が果たすことになつた。貨幣はそれ自体、価値を有するところの商品、特殊なる商品でなければならぬ。このような貨幣は価値尺度機能と流通手段機能とを統一的に有しており、先づそのものとして、あらゆる商品の価値尺度としての機能を果し、それに基づいて購買手段、支払手段として機能し、あるいはまた価値そのものとして価値保蔵手段、世界貨幣として役立つ。しかるに歴史の発展とともに流通手段機能より硬貨、紙幣等の貨幣代用物が生れ、また支払手段機能の発展より、信用貨幣(銀行券、小切手等)が生れ、それらはともに貨幣の代用物として購買手段、支払手段としての役割をはたしている。これら各種貨幣代用物の基礎には価値そのものとしての貨幣金が存し、価値そのものとして各種商品の価値を尺度しつゝそれにもとづいて、自己の代用物によつて購買手段、支払手段としての機能を果さしめてゐる。かくて最も厳密な意味において、貨幣とはわれわれ

は貨幣金を意味するし、其の他の紙幣、硬貨、銀行券あは小切手はすべて貨幣代用物として把握する。本稿では便宜上、貨幣代用物をも含めて最も広い意味において貨幣という言葉を使用するものである。

5 預金通貨の実体を何と見るかについては、従来から多くの学者によつて論議されている。それは(一)銀行預金のすべてが預金通貨であるとする説(小島博士)(二)預金のうちで当座預金だけが預金通貨であるとする説(高田博士)(三)当座預金のうちで現実には貨幣として作用する部分に限定する説(岡橋教授)(四)小切手が預金通貨であるとする説(土方博士)(五)預金請求権を預金通貨と見、小切手と当座預金の統一の上に預金通貨の形態規定を見る説(高木教授)等に大別出来る。この預金通貨は歴史的には手形流通にその成立の基盤をもっており、兌換銀行券と本質的には相連を見ない。私人手形にかわつて銀行が自己の社会的信用にもとづいて、銀行券を発行するかわりにこの部分を貸方記入して、成立するものが預金通貨である。銀行券が貨幣の支払手段機能の發展において成立するのと同じく、預金通貨も貨幣の機能としては支払手段機能にその成立の根底をもっている。ただ銀行券は発行と同時に流通界へ入つて行くことになるが、これに対し預金通貨の場合には、預金として一たん貸方記入されたものが小切手という移転用具を媒介として、流通界に入つて行くことになるのである。小切手は当座預金を引あてて出されるが、通常当座貸越もその中にふくめ

て考察されている。しかしわれわれは、当座預金、当座貸越だけに限定する必要はなく、別段預金(預金手形は別段預金にて処理される)をもふくまひめて要求払預金(Demand Deposit)とする方がより適切であると考ええる。

6 資金の質的統制は同時に量的統制をもなうことにもなるけれども、直接的には資金量の統制ではなくて、その流れる方向に対する統制である。この面から一定の計画にもとづいて、産業構造を所定の目標に適合させるような政策を資金政策として、通貨政策と區別して論じられている(国民経済雑誌、第九〇巻第二号、新庄博「通貨政策と資金政策」参照)。

7 ヒルファードディングは生産資本家を註記して「われわれが生産資本家というのは平均利潤を実現する資本家、すなわち産業資本家および商人を意味するのであつて、利子を得る貸付資本家および地代を得る地主に対応する」(一六六頁)とのべてる。彼のいう生産資本家は産業資本家に限定されるのではなく、商業資本家をも含めて、いわゆる機能資本家をさすのである。

8 ヒルファードディング「金融資本論」林訳一三八頁

9 ここでの現金というのはヒルファードディングのいう「完全価値ある金属貨幣、本位貨幣、金貨または銀貨に加うるに、強制通用力ある国家紙幣ならびに補助貨幣をもつてしたもの(をさす)」(前掲書一三四頁)のであるが、このほかに不換銀行券(実質的には紙幣)を加えなければならぬ。

信用創造の限界に立入る前に、われわれは銀行が貸出すのは貨幣であるのか、あるいは貨幣資本であるのか、この点について論議をすすめなければならない。

もともと貨幣資本とは商品資本、生産資本と同じく資本として身につける一つの形態を示すものであり、価値が価値増殖を目ざしてすなわち資本として循環するときに着てはまた脱ぐ運動形態にほかならず、いろいろの姿態変換をとげながらもその根底には価値としての資本が存するべきものである。商品資本、生産資本のような現実資本はそれみづから価値であり、それの姿態変換を示す限りでの貨幣資本は現実資本に基礎づけられている。貨幣資本は本来現実資本の運動に照応するものであるけれども、後にはそれと離れて独自の運動をするようになり、現実資本の増減に反作用を及ぼすようになる。更には現実資本とは相対的に独立して貸付資本となって銀行によって与えられるように

なる。貨幣資本の発展はこのようなものである。

ところで銀行の貸付けるのは貨幣なのか、または貨幣資本なのかについては、第一に貨幣を銀行が貸付ける場合から論を進めることとする。この場合は、例えば現実の商品流通を反映して振出された手形を銀行が買取ったとき——割引したとき——にあてはまる。すなわちその場合は商品流通を反映しているわけであって、商品資本の貨幣資本への姿態変換をば実現しただけである。いいかえると、それが資本の運動であつても要するに商品形態が貨幣形態において実現されただけであるから、この場合の銀行の貸出は、あらたなる資本の貸出ではなくて、単に貨幣の貸出であるといわれる。つぎに「資本の貸出」と称せられるときは、例えば現実に商品流通を反映しているわけではない空手形——融通手形等によって、銀行が貸出を行うときであり、換言すれば現実資本を今後において獲得し得る力をあらたに貸付ける場合である。この場合の貸付は現実資本の姿態変換が行われたのではなくして、貸出さ

れた貨幣資本によって、其の後に於いて現実資本を入手し得るわけである。すなわちその分だけあらたなる資本を与えたことである。しかし「貨幣貸付」

「資本貸付」いずれの場合においても銀行は利子をとって貸付けるのであり、したがって「貸手にとって資本

性をおびるから、そこで反対に貸付けられたすべての貨幣——その実際上の職能はますますあらたな生産資本の出発展をなすか、それとも既存の資本の流通過程を媒介するかになりつつある——は資本と看なされ、

そして支払手段としての貨幣の需要と貨幣資本としてのそれとが混同される¹⁾、こととなる。しかしながら

それが貨幣貸付であっても、あるいはまた資本貸付であっても、共に実質的には利潤を更に追求するために何らかの方法によって、機能するという点において差異はない。なるほど社会的に見ると銀行の貨幣貸付は商品の姿態変換であり、資本貸付は追加的資本を貸付けることになるけれども、借入れる側においては共に貨幣資本の借入れであり、貸す方の側からは貨幣（広

義）をば利子を徴して貸付けるのであるから、すなわち貸付貨幣資本——利子生み資本——としてあらわれる。ともあれ銀行の貸付けるのは現実資本ではないけれども、現実資本であったのを実現するところの、あるいは現実資本に転化し得るところの貨幣資本である。

社会的には「貨幣貸付」「資本貸付」として区別され得る貸付も、個別的企業的には資本の運動としてすべて貨幣資本の貸付および借入れとして把握することが出来るのである。

註一 ヒルファーディング「金融資本論」林訳一三七頁。

三

「貨幣貸付」「資本貸付」いずれの場合においても銀行は利子をとって貸付けるところから、貸手たる銀行にとっては単なる貨幣としてではなく貨幣資本として觀念せられている。また企業にとつても銀行より得たる貨幣資本をば、現実的には支払手段、購買手段として使用するにしても、それは企業の資本循環の中において使用する、いわば資本として充用することは既

に指摘したとおりである。

銀行より貨幣資本の供給をうける如き企業は既に銀行との間に当座取引をもっているのが通常で、貨幣資本の供給は多くの場合「預金造出」の形をとってあらわれる。アルバート・ハーンが「銀行の能動的業務は一般的にも又各個の場合にもそれに相応する受動的業務を惹き起すが故に、銀行の受動業務は能動業務に対する前提ではない。受動的業務は同時に行われる信用授与の反射に外ならない」とのべたのは「預金造出」の形での貸出の可能性を指摘したものである。銀行預金造出の形での貨幣資本の供給はいかなる程度まで可能であるか。その限界が明かにされなければならない。

ハーンがかって想定したごとく、無現金取引の行われる社会においては預金の造出は無限に行われる可能性をもっている。そしてその決済はすべて帳簿上の記入によってなされるから、銀行みづからによる信用創造の限界は存しない。しかし無現金取引は一つの想定にすぎない。現実的には一定の限界が存在していること

とは否定し去ることは出来ない。預金の形態での貨幣資本造出の限界をめぐって、銀行経営的立場から数々の公式によってその技術的限界が算出されている。²⁾ この限界が技術的にはあるにしても存するのは、実は「現金準備」の不可避性にその根拠があるのであるけれども、この「現金準備」にしても、もしそれが不足せる時には、中央銀行よりの供給によってまかなうことが出来るわけであるから、³⁾ 銀行経営的立場より貨幣資本造出の限界の算出は、実質的にはその意義はうたがわしい。むしろ貨幣資本造出の現実的な限界は銀行の側にあるのではなくして、銀行を含めた経済社会の状態に存するのである。即ち、

銀行による信用創造は貸付貨幣をば資本として利用するために行われるものであり、少くともそれを予想するものである。しかるに、貨幣(貸付)資本が利用される為には、借入貨幣資本によって運動に導入され得る処の現実的諸關係が現存することを要する。したがって貸付資本を現実資本として利用することの可能性

は、第一に資本として利用することの出来るもの、存在、いいかえれば現実資本の諸要素、生産手段と労働力の存在によって制約されており、第二に本質的なものとして、資本が資本として存在し得る為の利潤率および利子率の一定の高さの現存、もしくはその予想の存在によって規定されている。例えば産業循環の回復期および好況期には貸付資本を現実資本として利用することが可能であるが、恐慌不況の時には現実資本の物的諸要素は過剰に存在しても、それによって積極的に利潤を獲得し得る可能性は存しない。この点についてトラハテンベルクは次の如く云う。

「要するに信用取引額が貸付けられた貨幣額の回収を前提とする限り、信用一般の客観的基礎は、個々の具体的な場合とは無関係に資本の再生産の客観的な可能性以外のものではあり得ない。信用取引が増大した価値の回収を前提とする限り、信用の客観的基礎としての資本の拡大再生産をあげなければならない。信用発展の可能性は一般に資本の再生産及び拡大再生産過

程としての資本循環に基いている。貸付資本の運動は現実的資本の運動すなわち資本の再生産および拡大再生産過程にその基礎を有しているのである」と。

註1 アルバート・ハーン「銀行信用の国民経済的理論」大北訳七一頁。

2 私経済的、経営的立場からする信用創造の技術的限界については、フィリップスは一つの金融組織をなす銀行全体を一体として観察する場合 (Banking System) と他の銀行から切り離されたその中の一銀行 (Individual Bank) の立場に立つ場合とを区別して別々に公式を示している。其の他、ロジャース、ローレンス、シュレジンガー、エンゼル、フィセク、ピグー、ジンガー等が著名である。

3 中央銀行は金利政策、公開市場政策によつて通貨量の統制を行なおうとするけれども、これは無条件に予防的な効果があるとはいえないしその効果には一定の限界があるのをまぬがれない。支払準備政策については常に到るところで採用されているわけではない。不換銀行券の発行量はきわめて弾力性にとむものである。

4 トラハテンベルク「現代の信用および信用組織」川崎訳一〇〇頁

以上われわれは銀行の機能をめぐって、その貨幣資本造出機能の存在を指摘し、その意味を究明して来たわけである。銀行は現金や預金通貨の形態で貨幣資本を供給することになるけれども、現実的には供給された現金や預金通貨は購買手段、支払手段として機能する。しかしながらこれら最も広い意味における通貨は各種企業みづからにおいては、それぞれ資本循環運動の中に入りこんで流通する。この点に注目して、これを貨幣資本として把握し、銀行は如何なる程度まで貨幣資本を造出出来るものであるかをみようと試みた。そして貨幣資本造出の限界は銀行みづからの側におけるよりも、むしろ経済社会の側においておのづからなる限界が劃される点を見たのである。